

こちらネイパルレンジャー遊友隊！

■ 事業のねらい

長期自然体験をとおし、自然の素晴らしさや厳しさを体感しながら、防災意識を高め、たくましく生きるための力を身につける。

- 実施日 平成24年8月7日（火）～10日（金） 3泊4日
- 参加対象 小学4年生～中学3年生 40名
- 参加実績 参加者：40名
 小4＝16名、小5＝13名、小6＝8名、
 中1＝3名
 男子＝24名、女子＝16名
 運営協力者：大学生6名
- 備考 活動場所：砂川少年自然の家、北海道子どもの国周辺
 砂川消防署、砂川遊水地管理棟
 講師：気象予報士・防災士 菅井貴子氏
 自然の家自然体験アドバイザー 佐藤隆氏

1 事業実施の背景



大規模な災害発生時、自治体や消防による救助・援助等には限界がある。東日本大震災以降、大災害にも対応出来る防災意識の向上が再認識されており、自分の身は自分で守る「自助意識」と、お互いが共に助け合う「共助」の機能を高めていくことが、これから特に重要となってくる。

本道は、昔から津波や地震、豪雪等の様々な災害に見舞われ、大きな被害を受けてきたことから、学校教育においては、防災教育の取り組みが進められている一方、家庭や地域における防災の意識はまだまだ高いとは言えない。

これからは、道民一人一人が、日常的に災害の発生に備える意識を高め、自ら防災対策を実施しなければならない。

本事業は、豊富な自然を活用しながら、様々な体験活動をとおり、防災に関する意識の高揚と災害に対応する力を身につけることをねらいに実施した。

2 プログラムデザイン

受付 8月7日（火）10:30 解散 8月10日（金）13:00

	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
8/7 (火)		受付	出発の準備	仲間づくりゲーム	昼食	活動① マップリーディング ふしぎの森探検		活動② ランタンづくり	夕食	活動③ ナイトハイク		自由交流	就寝準備 入浴	就寝(宿泊棟)
8/8 (水)	起床・朝食	活動④ 自作小屋をつくろう！Ⅰ			昼食	活動⑤ 野草ウォッチング	活動⑥ 自作小屋をつくろう！Ⅱ	活動⑦ 薪割り体験・火起こし体験 野外炊飯(カレーづくり)			就寝準備 入浴	自由交流	就寝(小屋)	
8/9 (木)	起床・朝食	活動⑧ レスキュー体験・救急体験 (砂川消防署)			昼食	活動⑨ Eボート体験・釣り体験 (遊水地管理棟)		夕食 バーベキューパーティー (野外炊飯場)		キャンプ ファイヤー	就寝準備 入浴	自由交流	就寝(宿泊棟)	
8/10 (金)	起床・朝食	活動⑩ 講演会 菅井貴子氏(講義)	解 自作 小屋 解体	流 し シ ー メン	ふ り か え り	解 散								

■ アクティビティについて



■ 意図

- 身近な廃品が代用品として有効活用できることを知るとともに、災害時にも役立つことを身につけることを目指した。
- 人間と自然の関わりについて知り、自然を大切にする心や自助意識を持って行動する態度を養うことを目指した。
- それぞれの活動の中で、「活動のねらい」を参加者に伝え、防災意識を高めることを目指した。

■ 留意事項

- 危険が伴う活動や雨天時のプログラムについて、早い時期から準備を進めた。また、参加者の安全を確保できるよう、自作小屋作り等、事前に試作をし、あらゆる事故を想定し、対応できるよう準備した。

3 活動の様子



■ 当日の様子

1日目(8月7日)は、砂川少年自然の家周辺の豊富な自然を活用し、初めて会った仲間との親睦を深めるため、各グループに分かれて、マップリーディングをした。

その後、ペットボトルを使ったランタンづくりを行い、そのランタンを使って、ナイトハイクを行った。夜の森を歩きながら、森に生息する生き物たちの声、風で揺れる草木の音など聞き、普段の生活では体感できない活動となった。

2日目(8月8日)は、参加者の中で一番の楽しみにしていた自作小屋づくり。事前に与えられた材料(竹竿、ビニールシート、ダンボール、角材など)をどのように活用するか、班で考えながら、作業を行った。全部の班が、完成させることができた。

その後、砂川少年自然の家自然体験アドバイザー佐藤隆氏を講師に招き、身近な野草を観察することをねらいに、薬草として活用できるものや絶対に触れてはいけない草木を学んだ。

夕食は、野外炊飯でカレーライスづくり。薪割り体験や火起こし体験も行いながら、今の生活と昔の生活の様子を比較し、先人の苦労や工夫を仲間と共感し合った。

3日目(8月9日)は、午前中に砂川消防署に移動し、心肺蘇生法とレスキュー体験を行った。心肺蘇生法の体験では、反応確認から呼びかけ、心臓マッサージ、AEDの使用方法に、参加者は真剣な眼差しで取り組んでいた。

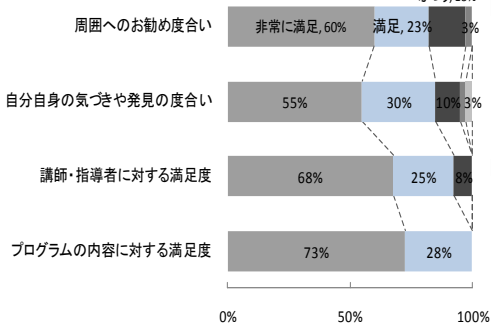
午後からは、砂川遊水地管理棟へ移動し、2グループに分かれ、仲間と助け合いながらパドルを漕いで進む「Eボート体験」や「釣り」をとおして、遊水地の生態について学んだ。

夜にはキャンプファイヤーを行った。ここでは、今年岩手県宮古市を視察した高校生ボランティア2名が、宮古市での被災状況について説明をし、東日本大震災のことを決して忘れず、身近な人に震災のことを語って欲しいと訴えた。その後、学生ボランティアの企画した「3日間をふりかえるスライドショー」を見た。大いに盛り上がり、フィナーレでは、全員が握手をして涙を流し、「遊友隊！」でのお互いの健闘をたたえ合い、来年の再会を誓った。

最終日(8月10日)、UHB「U型テレビ」に出演している気象予報士菅井貴子氏を講師に招き、天気図の見方、雲の様子から天気事が事前に分かること、雷の対処方法について説明を受けた。菅井氏の分かりやすい説明により、天気の基本知識を正しく学び、様々な気象現象への対応を理解することができた。その後、自作小屋を解体し、ファイナルパーティー(流しソーメン)を行った。楽しく過ごした仲間と心ゆくまで流しソーメンを堪能した。

別れのつどいでは、この4日間を振り返り、「たくさんの友達を作ることができた」「防災への関心が高まった」などと、各班の代表者がしっかりと発表をした。

4 事業評価



■ 評価方法・重点

本事業は、相手を思いやり、協力しながら主体的に行動する態度を育てること、自然や生命を尊重する態度を育成するため、野外での活動に時間を多くとった。そのため、「野外生活・技能」、「思いやり」、「交友・協調」などの向上について重点をおいた。

■ 参加者の変容【IKR調査結果】

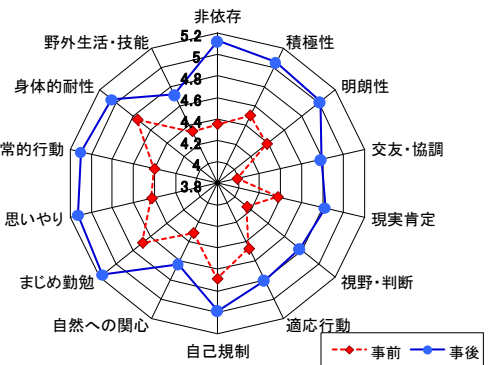
全ての項目において事後が事前以上の数値を得、平均して0.5ポイントの向上がみられた。

重点である「野外生活・技能」については0.4ポイント、「思いやり」については0.7ポイント、「交友・協調」については0.8ポイントの向上がみられた。

■ 結果の分析・考察

「思いやり」、「交友・協調」については、ねらいどおりの向上があったと考える。

また、「非依存」や「日常的行動」のポイントが著しく向上したのは、「お互いが励まし合い、失敗を恐れずに行動できたこと」や「時間を守り、早寝早起きができた」ことが要因と考える。



5 まとめ



■ 成果

○ 「防災意識」と「災害時に正しく判断し、対応する力」を高めるとともに、地域の素材や人材を活用したプログラム、仲間と協力して課題に取り組む新しいプログラムを取り入れることができた。

○ 長期の本事業をやり遂げたことで、参加者は達成感や成就感を得ることができた。

■ 課題・今後の方向性

○ 4日間の活動には、年齢による作業速度の違いから予想以上に時間がかかってしまったものがあった。時間に余裕を持たせながら、活動させることが必要である。

○ 関係機関と早くから連絡を取り合ったが、もう少し綿密な打ち合わせを行う必要がある。

○ 自らの危険を予測し、回避する能力を高める防災意識向上につながるプログラム開発などを引き続き行う。